



FORUM 7

15:40～16:00

N. RESCUEが見た被災地／気仙沼での活動から

鳥居 恭好 生物資源科学部・准教授 ・ 成澤 直規 生物資源科学部・助教
竹永 章生 生物資源科学部・教授

本フォーラムから四年前の2011年3月11日午後2時46分、東日本大震災が発生した。湘南の地にある日本大学生物資源科学部では、幸運にも人的被害はなかったが、しばらくの間、計画停電や授業スケジュールの変更などで落ち着かない日々が続いた。何人もの学生達が被災地にボランティアに出かけ、研究教育を通じた被災地支援活動も始まった。演者らは震災から半年後の2011年9月9日初めて宮城県気仙沼市を訪問したが、悲惨な状況に言葉を失うばかりで、具体的な支援活動をスタート出来ずにいた。

震災から一年あまりが過ぎた2012年の4月にN. rescueへの協力依頼があり、平成25(2013)年度から2年間の学長指定研究プロジェクトに演者らも参加した。「国際救助隊の隊員」とは言うものの、実際に災害の現場に我々が出向いても足手まといにしかならない。被災地をはじめとした各地での、教育研究のサポートが主要な任務だろうと考えた。

同年7月初頭、藝術学部の木村教授、理工学部の青木教授を筆頭に数名の関係者が生物資源科学部に来校した際、気仙沼市鹿折地区の水産加工業の組合の顧問として復興支援に取り組んでいる藝術学部デザイン学科の布目幹人講師と知遇を得た。数度のミーティングを経て、9月に気仙沼現地へ同行することになった。藝術学部デザイン学科の布目ゼミ(通称「Nゼミ」)の十数名が中心となったメンバーで、学生が中心となって新製品企画の提案を行うことが訪問の主な目的である。Nゼミでは広告デザインを学んでいるので、実践的教育を兼ねての被災地支援という事になる。鳥居は食品の専門家という立場で参加した。

組合の事務所をアトリエとして使わせ頂き、地元関係者との討議、被災地や漁港施設、食品工場などの見学などの拠点とした。

討議の中で、様々な課題が浮かび上がってきた。以下に例を挙げる。

- ・ もともと気仙沼は海産物・水産加工品の分野でブランド力があつたため、新商品開発が積極的に行われて来ず、開発ノウハウの蓄積がされていない。
- ・ 震災から一年半が経ち、被災地支援目的での購入行動に陰りが見えるため、被災地イメージを離れた新しい魅力的な商品が必要。
- ・ 特に若年層向けの市場や新しい食べ方を開発したい。

- ・ サメ肉など、現地では豊富だが地域外への流通の少ない食材が売れるようになれば業界の大きな力になる。

これらのことを踏まえ、2日目の午後から3日目の朝まで、Nゼミ生の諸君がアイデア作りの作業に徹夜で取り組んだ。この過程に立ち会うことは、演者らにとって大きな学びとなった。我々食品科学の研究者は、食品成分・栄養素の分析や、安全性や機能性の評価についてはわかる。そのため、数値として取り扱える内容から食品開発を考えがちである。もちろん食品には美味しさや栄養性、安全性が不可欠のだが、それだけでは、知ってもらえる、手に取ってもらえる、買ってもらえる商品を作ることはならない。まるで、一つの山を登るのに、まったく違うルートがあるということを突然教わった様な驚きがあった。

3日目(9月19日)の朝、地元関係者を対象としたプレゼンテーションが行われ、徹夜の努力の成果として三つのプランが提案された。それぞれ若い世代の食行動や消費行動を踏まえ、商品ラインナップに包装デザインまで含んだ具体的なものだった。限られた時間の中で学生諸君が苦心して練った各プランはとても魅力的な物であり、地元関係者も多いに感心していた。殊に、「被災地だから」という方向ではない商品開発を目指す関係者の希望に充分に沿った内容だった。気仙沼の地元企業が消費者のニーズにあった魅力的な商品を開発していくための大きなヒントとなることが期待される。

気仙沼訪問から約一ヶ月後、藝術学部の木村教授を生物資源科学部に招聘し、特別講演を行って頂いた。この中で「大勢の人がいれば、皆出来る事が違う。皆、違う武器を持っている。自分に出来ない事は、出来る人とつながってやればいい」という言葉が強く印象に残っている。ちょうど一ヶ月前に気仙沼で感じた事と合致していたからだ。学部、専門の枠を超えて協力し発信するN. rescueプロジェクトの意義をリアルに感じた瞬間である。

日本大学OB・関係者のつながりによる東日本大震災の復興支援は現在もお進められている。復興支援に限らず、N. rescueの様な学部間連携の活動の重要性がこれからさらに増していくと確信している。